



病理医があかす たちのいいがん、悪いがん

筆者は、"社会派病理医"そして"穴埋め病理医"でありたいと願っている大学病院勤務の一介の病理医である。患者さんの治療法を決める最終診断となる「病理診断」をくださる病理医として働いてきて、そろそろ 25 年間になる。いきなり病理学教室に入局したために、患者さんと本当に密に接したのは医学生時代のわずかな体験しかない。でも、病気に関するプロとして、患者さんのためになる診療に貢献したいと願っている。患者さんのすぐそばにいる病理医でありたい。そして、医療の質の向上に少しでも役だつ情報や提言を発したい。それが自ら社会派を称するゆえんである。また、こうした外向きの活動がこれまでまったく不十分だったことを深く反省し、少しでも穴を埋める役目を果たしてみたいとも思っている。

本書では、日々悩む一病理医の姿を正直にさらけ出すことを通じて、病理医の存在そのものとその医療における役割を知ってもらうとともに、がんに悩み、がんと闘う患者さんやその家族に対して、プロの病理医の目からみたアドバイスできたらいいと思う。ここには、筆者の体験したニアミス、誤解、誤診のたぐいが多数披露されている。しかし、現状を曝露して読者の皆さんを怖がらせるのが本書の目的ではない。医療にリスク(危険性)はつきものだ。しかし、そのリスクを少しでも回避するためには、医療現場でどのようなことができるのか、そこにおける病理医の役割は何なのか、患者さん側からはどんなアプローチが可能なのか、などについて提案してみたかった。「ま、いいや」的診断、「エイヤッ」的治療のリスクを具体的に示す一方で、「念のため」治療を行う現行の医療のリスクについてもまた言及させていただいた。

病理診断のもつ第三者の客観性を読者の皆さんに少しでも理解していただくことを通じて、病理医のもつ幅広い知識と経験を読者の皆さんにぜひうまく利用してもらいたい。病理医も、今までのように病院のすみでほそぼそと暮らす黒子的存在ではなく、もっと患者さんからみえるように外向きのベクトルを発信しなければならないだろう。この提言は、むしろ全国に 1700 名あまりいる認定病理医仲間に伝えたいところでもある。

一診断病理医の問いかけに対して、前向きな批判がいただけることを楽しみにしている。

(著者：堤 寛、全 244 ページ、¥1,500、税別、双葉社、東京、2001 年 4 月初版、すでに絶版なので希望者は著者：堤 寛まで)

[close](#)